

伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

片岡佳孝・岡本晴夫

1. 目的

伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、伊庭内湖内で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲にも貢献していることが分かっている。それを受けて、ホンモロコの産卵保護を目的とした伊庭内湖周辺の禁漁措置が、関係する漁業協同組合等の合意をもとに琵琶湖海区調整委員会指示により2012～2015年度に行われた。期間は、2012年度が4月1日～30日、2013～2015年度が4月16日～5月15日であった。また、2016年度は、漁業者の自主的な取り組みとして5月と6月の2ヵ月間の禁漁が琵琶湖全域を対象として行われた。

伊庭内湖における禁漁の効果を評価するために伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

2. 方法

調査は、平成28年5月19日から8月9日にかけて計7回行った。伊庭内湖(大同川を含む)に9地点を設定し、ビームトロール網(小型底引き網)によりホンモロコ稚魚を採集した。採集した標本は氷冷して持ち帰り、後日ホンモロコ稚魚数を計数した。各地点の生息密度(尾/㎡)を採集尾数(尾)/曳網面積(㎡)として算出し、それらの平均値を伊庭内湖内の稚魚生息密度の指標とした。曳網面積はビームトロール網の間口(m)×曳網距離(m)として算出した。

3. 結果

調査期間中の平均生息密度(±標準偏差)は0.32±0.49 尾/㎡(5/19)、0.4±0.51 尾/㎡(5/31)、0.37±0.31 尾/㎡(6/14)、0.26±0.51

尾/㎡(6/27)、0.08±0.05 尾/㎡(7/12)、0.03±0.06 尾/㎡(7/26)、0.03±0.03 尾/㎡(8/9)と推移した(図1)。生息密度のピークは、5月31日の調査であった。

生息密度の推移から、伊庭内湖で成育した稚魚は7月中旬までには琵琶湖へと移動したと考えられた。

伊庭内湖は、水門により水位管理されており、水門の開閉がホンモロコの移動に影響を与える。本年度については、順調に琵琶湖へと移動できたと考えられた。

伊庭内湖はホンモロコの産卵と稚魚の成育場所として重要であり、琵琶湖全体のホンモロコ資源に与える影響も大きい。今後のホンモロコの資源管理のためにも、現在の漁業禁止期間の有効性を評価する必要がある。伊庭内湖内のホンモロコの産卵は3月から7月頃まで続くため、資源形成に最も影響のある産卵時期を把握し、その時期を中心とした禁漁期間を設定する必要がある。

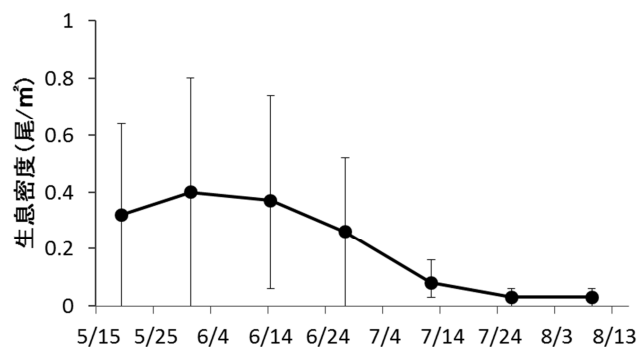


図1 伊庭内湖(大同川を含む)9地点の平均生息密度(尾/㎡)の変化